陳舜臣さんを語る会通信

NO.66　Apr.　2022

発行　兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」
Tel. 078-911-1671
編集　「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員
発行日　2022年4月20日

1990年刊行の推理短編集2冊　『異人館周辺』『杭州菊花園』

本号では、1990年に刊行された短編集を二冊、取り上げました。どちらも、推理小説風に仕立てられた作品が収録されています。『杭州菊花園』『異人館周辺』の順で紹介いたします。（編集委員　橘雄三）

《1.『杭州菊花園』》

【初出誌　単行本　文庫版】

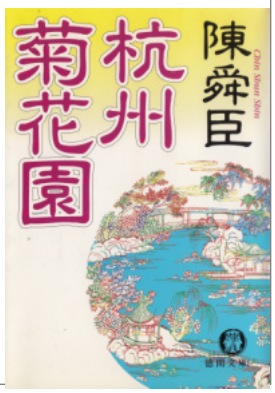
まず初出から。文庫版掲載順。

「杭州菊花園」　『小説新潮』1975年3月号
「夢と財宝」　『週刊小説』1976年1月23日号
「宝蘭と二人の男」　『別冊文春』1972年夏号
「もう一人の」　『小説現代』1972年3月号
「旋風島綺譚」　『小説新潮』1971年8月号
「四十二年目のクルバーン」　『文藝春秋』1982年1月号
「ひげ布袋」　『文藝春秋』1973年7月号

単行本化は1990年、徳間書店で、また、1999年、同社から徳間文庫として刊行されています。

【登場人物】『杭州菊花園』所収の7編のうち、「四十二年目のクル…」は双子の姉妹の妹が主人公で、「宝蘭と…」は陳さんが亡父から聞いた話の記述です。他の５編はいずれも、作者の分身の「私」が、語り手、狂言回しを務めます。

（文庫版表紙→）



《2. 徳間文庫『杭州菊花園』川村湊「解説」抜粋転載）》　小見出し、及び傍線は編集委員の加筆。

華僑出身小説家としての陳舜臣氏の「華麗なる小説世界」

ここに収められた七編の短編小説は、そのほとんどが日本人ではない主人公もしくは語り手を持ち、作品の舞台も中国の杭州であったり、北京の骨董街・琉璃廠（リウリーチャン）であったり、新疆（しんきょう）ウイグル自治区のウルムチであったりして…。

日本語で書かれた小説作品の中で、主人公ないしは語り手が非日本人であるというケースは比較的珍しいし、設定された舞台が、中国といってもあまり日本人に馴染みのない張家口や潮州であるというのは、珍重（ゲェトア）に値する。さらに中国庭園、台湾の芸姐の世界、南シナ海の海賊、モスレムのクルバーンの祭り、指頭画といった〝大道具や小道具〟は、さすが「大中華帝国」の文化的爛熟を背負った華僑出身小説家としての陳舜臣氏の華麗なる小説世界にふさわしいものなのである。

単なる「謎とき」でない、ミステリーを成立させる「多重構造」の世界

だが、もちろん単なる物珍しさや、豪華絢爛（けんらん）さ、波瀾万丈さに目を奪われていればそれでいいというものではない。陳氏は、陶展文という中華料理屋の「オヤジ」である名探偵が活躍する『枯草の根』などの長編ミステリーが出世作となって日本文学の世界に登場したが、その作品世界のミステリー性とは、ほかの「日本人作家」のいかにも探偵小説的な「謎とき」性とはいささか異なっているような気がする。

殺人事件がある（もちろん、盗難事件でも傷害事件でも、事故や自殺でもいいのだが）。そこに現れている表面の事象、現象の背後に、いわば第二の現実とでもいうべき現実の層があって、ミステリーの「謎」はそこから胚胎している。表の現実に表わされた点と線をたどってゆくと、裏地に縫い込まれた図柄があぶり出しのように浮き上がってくる。こうした二重構造（多重構造）の世界がミステリーを成立させる要因なのだが、陳氏のミステリー世界では、その多重構造の層が複雑であり、かつインターナショナルであり、さらにきわめて「政治的」なのである。

「四十二年目のクル…」冒頭の舞台
カシュガルのエイティカール寺院

www.chinaviki.com より

『杭州菊花園』 各編内容・導入部 及び補足

杭州菊花園	神戸のふるい華僑に銭延真という、浙江省杭州市出身の菊作りの名人がいた。銭は若いころ、杭州で造園の仕事をしていた。近所に秀綺というきれいな娘がいて、銭の心を捉える
夢と財宝	考古学者、今川博士は「私の唯一のロマンスかな？」と言いながら、若き日の物語をはじめる。日中戦争の始まる前年、今川博士は北京から大同へ向かう列車に乗っていた
宝蘭と二人の男	昭和初年、旧三ノ宮駅(今の元町駅)の東口を北に出て道路を渡ったあたりの裏手一帯に、二軒の芸者屋と「台湾芸姐」とよばれる女性たちの下宿屋や飲食店が並んでいた。「私」は、亡父から聞いた林宝蘭の話を、忘れないうちにと記す
もう一人の	数年前、「私」は香港で、ラーナ・ダスという初老のインド人紳士に出会う。氏は、まだ行ったことはないといいながら、北野町のこと、そしてそこでおこった事件のことまで知っている。題名「もう一人の」は、もう一人のラーナ・ダスという意味
旋風島綺譚	去年、「私」は香港へ旅行し、一軒の印材店の主で、若いころ、海賊につかまったことがあるという李明培と、その細君で野性美を持った女性に出会う。題名の旋風島とは海賊の一味が牢屋に使っていた島
四十二年目のクルバーン	双子の姉妹の妹・ファーティマが、カシュガルのエイティカール寺院前の広場で四十二年ぶりにクルバーン(イスラム教徒の行事。供犠節)を見るところから話が始まる
ひげ布袋	「私」は琉璃廠の栄宝斎の一室でタクシー待ちをしているとき、宋福の夢?を見る。宋福は、「私」が小学校の登下校の途中、よく見かけた人物で、子供たちは「ひげ布袋」と呼んでいた

下の記述、補足1及び2は、1面にあげた徳間文庫『杭州菊花園』川村湊「解説」の続きです。

《 補足1.『宝蘭と二人の男』について 》

二人の男による相討ちの殺人事件は、「台湾芸姐（芸者）」である林宝蘭をめぐる三角関係の痴話喧嘩によるものとして処理されたのだが、それはあくまでも現実世界の表層面に表わされたものにすぎないのである。解放前の中国社会には人身売買が横行していたのだが、林宝蘭は「査某嫺（ツアボーカン）」と呼ばれる奴隷的な立場の下女だった。彼女は「大人」の娘の嫁入り道具の一つとして北京の婚家に移され、その軍閥の息子の家が「造反」で解散させられた時に「ひげのデブ」の「軍人」の妾となった。そこを追い出された彼女は、ゆくあてもなく、外国航路の船員にだまされて、神戸三ノ宮の「芸姐間（ゲエトアキン）（芸者屋）」に売り飛ばされたのである。

この林宝蘭の半生の物語だけでも、十分に興味深いものだが（中国の女奴隷、妾、芸姐といった女性史研究には見逃せない要素があるだろう。そうした被抑圧的な立場にいても宝蘭が実に逞しく、天衣無縫に生きていることについても感嘆させられる）、ミステリー小説としては、この作品は周到な二重底の構造によって構成されているのである。

宝蘭の「旦那」（実質的にはヒモ）の座をめぐっての三角関係のもつれから生じたと思われた殺人事件は、実は中国の秘密共産党員（赤色テロリスト）と、それらをつけ狙う軍閥系白色テロリストとの抗争であって、二人は宝蘭の「旦那」という立場でカモフラージュしながら日本に潜入し、互いに互いを狙っていたというのである。ただし、そのことは宝蘭はしらない。

《 補足2.『夢と財宝』について 》

今川博士が張家口行きの列車の中で知り合った日本人の美女が何者であるかということを、厳密に明らかにしなければならない必要性はないと思われる。盗掘された幻の遺品の逸品をスケッチし続けた考古学者の純情は、偽物の出土品を売買する悪徳業者に謀られたものなのか。さすが、中国には手の込んだ詐欺もあるものだと感心するか、摩訶不思議の幻妖な体験もまたありうると考えるべきか、読者は自分の好みのままにどちらかを選択すればよいのである。

《 補足3.『ひげ布袋』について 》

この作品に文化大革命の記述があります（文庫版 p. 258-59）。陳舜臣さんの小説では珍しいことです。

文化大革命のとき、この栄宝斎は「黒い美術店」として、抗大美術学校の紅衛兵に攻撃された。ブルジョア階級にばかり奉仕して、労・農・兵への服務を怠ったということで、槍玉にあがったのだ。…。

北京琉璃廠 古書骨董文房 栄宝斎

ja.wikipedia.org/wiki/栄宝斎 より

『異人館周辺』 各編内容・導入部(1)　及び補足

《1.『異人館周辺』》

【初出誌　単行本　文庫版】

初出は、すべて『オール讀物』です。

初出年月は次のとおりです。文庫版掲載順。

「崖門心中」	1987年8月号
「蟹の眼」	1988年7月号
「秘閣の梅」	1989年7月号
「金に換えず」	1989年12月号
「夾竹桃の咲く家」	1987年2月号
「地天泰」	1989年2月号
「梅花拳」	1989年1月号
「パンディット」	1987年5月号
「異人館周辺」	1979年2月号

単行本化は1990年、文藝春秋社で、また、1993年、同社から文春文庫として刊行されています。

【登場人物】　『異人館周辺』所収の9編はいずれも、作者の分身の「私」(1編のみ「ぼく」)が登場し、語り手、狂言回しを務めます。

文藝春秋社『異人館周辺』表紙
挿画　小松益喜
「大きなガス灯のある異人館」一九三九年
提供 ㈱神戸新聞マーケティングセンター
AD 森 玲子

《2.『異人館周辺』各編内容・導入部(1)》

がいもんしんじゅう 崖門心中	昭和15年前後、神戸に移り住んだ洪若源という中国人は、心中の片割れだという噂を立てられていた。心中の片割れだとか、人を殺して財を奪ったとか、悪い噂を立てられるのは、一代で財をなしたとか、人に羨まれる理由があるものだが、洪若源は、回教寺院の近くの路地裏の長屋に住むペンキ屋に過ぎなかった。戦争の末期、「私」はやっと洪若源が他人に羨望されるものをもっていることを知る。それは美しい妻である。二十歳になったばかりの「私」には、まばゆいばかりの美貌であった。崖門は地名(マカオの西)
かにのめ 蟹の眼	かつて、祖父の友人に、「私」たち兄弟が「蟹の目玉」と呼んでいる人がいた。「蟹の目玉」は、ある時期、毎日のように我が家に来ていた。彼は絵描きで、といっても蟹の絵ばかり描いていたのだが、字を書いたり、篆刻をしたりするのが好きだった祖父とウマが合った。祖父は「私」が小学校三年生のときに他界し、「蟹の目玉」は、その後、我が家に立ち寄らなくなった。昨年、「私」は元町を歩いていて、「蟹の目玉」に出会う。「蟹の目玉」が我が家に来ていたころから、60年近くたっていた。生きておれば百歳を越えているだろう。同じ人物であるはずがない
ひかくのうめ 秘閣の梅	「私」は、三十年ぶりに須磨の早崎邸に早崎順造を訪ねる。早崎家は船成金で、順造の祖父が五千坪の敷地に、大邸宅を建てたが、これは空襲で焼失し、現在の建物は戦後、再建されたものだ。話は三十年前に遡る。当時、早崎家に、清子という、順造の兄・健一の未亡人がいた。「私」は、この、楚々とした美しい女性、清子に夢中になる。そして、二人は、須磨の裏山で、週一度のデートを重ねる間柄となる。「私」は、「あなたが身につけているものがほしい」と言い、梅をあしらった秘閣を貰う。秘閣とは、字を書くときに、ひじをのせる台のことである

《補足1.文庫版キャッチコピー》

波止場から異人館の丘にいたるトーアロードには、明治の初めから百年余の歴史がある。この多民族の住みつく町は、表から見ればエキゾチックな旅情をかきたてる町だが、裏にまわれば多くの実らざる愛と宿命と密謀とのドラマが渦巻いている。

ミナト神戸に生まれ育った著者が紡ぎだす、9篇のロマンティック・ミステリー。

右の画像は『外国人居留地と神戸』
(神戸新聞総合出版センター 2013) より転載。→

《補足2.トーア・ホテル(文庫版p.229に記述)》

写真は1926年頃のトーア・ホテル。1950年焼失。

『異人館周辺』 各編内容・導入部（2）及び補足

金に換えず	堀尾氏は酒造業者の一人であったが、引退し、好きなゴルフと文房四宝などのコレクションに明け暮れるという身分であった。芦屋に豪壮な本宅があったが、彼は、灘五郷に近いところの「巣」に住んでいた。「私」はひと頃、コレクションを見せてもらうため、しばしば「巣」を訪問した。堀尾氏は、「私」が行くときまって「プロイセン」にコーヒーの出前を頼んだ。コーヒーを運んでくるのは、三十代半ばの顔立ちの整ったものしずかな女性であった。ところで、「私」は、「プロイセン」の女性に対する堀尾氏の態度に不自然なものを感じる。題名は、古墨「金不換」からきている
きょうちくとう 夾竹桃の咲く家	「私」は大宮伸治とは、近所に住む学生同士ということで親しくしていた。彼は、近所のバーンズというアメリカ人から個人的に英語を習っていた。バーンズ一家は、太平洋戦争直前に帰国した。大宮は昭和17年に大学を出て、海軍予備学生となった。終戦の前年の夏、大宮は中尉の襟章をつけ、「私」の家に立ち寄ってくれた。大宮は、「もうこれで会えないだろう。…いずれにしても、ぼくは生きてはおれない身だよ」と、さびしげな笑いをうかべ、塀越しに夾竹桃の花がのぞいている家の前で、「ここがバーンズ夫人の家だった」と呟く
ちてんたい 地天泰	山中君は小学生のころ、父親が易者であったので、「易者」と呼ばれていた。彼には、長いまつげが印象的な姉さんがいた。「私」はその人を意識していた。やがて、山中君はブラジルへ行ってしまった。戦後、十数年たった、三十代半ばのことである。元町裏に「地天泰」という易者の看板のかかっている家があり、「私」は仕事で、その家の前を通ることがよくあった。その日、その家の前で、ランニングシャツにステテコ姿の男、山中君に再会する。「おーい、冷えたビールあるか」という山中君の声に「はーい」とこたえ、出てきた女性を見て、「私」はビックリする
ばいかけん 梅花拳	阿蘭は15歳のとき、台湾からやって来て、神戸に住む70歳の台湾人の妾になった。数年後、老人は亡くなり自由の身になったが、次々、男と同棲した。男運はきわめて悪かった。しかし阿蘭は、いつも幸せそうに笑っていた。50をいくつか過ぎて、また男と同棲した。大阪で万博が開かれた(1970年)ころである。相手の男は孔継道という広東人で、接骨や整体術を施していた。若いころ、武術を身につけ、それも相当な腕で、陳廉伯(広東総商会会長)の用心棒をしたことが自慢であった。「私」は孔継道から、彼の人生を聞き取る。題名「梅花拳」は拳法の型
パンディット	2・26事件のことが子どもの耳にも入ってきた1936年、「ぼく」が卒業を間近にひかえた小6のときから話は始まる。神戸三宮、白雲楼という広東料理の店に、「ラマ寺」と「ぼく」たちが呼んでいる狭い部屋があった。そこは、暗く、仏像らしきものが安置され、コックの習源(しゅうげん)さんと、店の人ではないパンディットというニックネームのインド人の礼拝所となっていた。店主は趙といい、「ぼく」はその息子と仲がよかった。パンディットは、まちでよく見かけた。たいていリヤカーを牽いているか、手押車を押している姿であった。彼は在留インド人の雑用をしていたそうだ
異人館周辺	「私」が久しぶりに、「ふしぎなじいさん」と呼ばれている趙さんに会い、家まで送っていくところから話は始まる。趙さんは、6年前に亡くなった父の友人で、80歳近い。趙さんの家は広東部落などと呼ばれているトーアロード西側の路地にあった。趙さんのお父さんも、趙さんも、イギリス留学を経験していた。そして、趙さんは、今まで、職業らしい職業に就いたことがない。趙さんのお祖父さんは、香港からきた船舶塗装の職人で、子どもや孫にそんな生活をさせる蓄えがあったとは考えられない。趙さんが「ふしぎなじいさん」、と呼ばれる所以である

補足3 陳作品頻出「渡し舟殺人事件」

『異人館周辺』「崖門心中」から抜粋引用します。（文庫本 p.9-10）

華僑社会で、ひどい噂を立てられるのは、たいてい大金持ちである。徒手空拳、日本にやってきて、みるみるうちに大富豪となったような人は、嫉視の対象にもなる。

ある著名な大富豪には、

ー故郷で渡し舟の船頭をしていて、たまたま金塊を持って商品の仕入れに行く商人を乗せ、それを殺して死体を河に投げすて、自分は金塊を奪って逐電した。日本で商売に成功したのは、強奪した金塊というもとでがあったからだ。

という噂があった。そんな噂は嫉妬がつくりあげたものといってよい。

渡し舟の船頭
沈従文（しんじゅうぶん）『辺城』挿絵を拝借

そして「異人館周辺」にも、ほぼ同じ記述があります。同様の記述の最初は『三色の家』です。これらのほか、『神戸というまち』「二つの海」にもあります。「二つの海」では呉錦堂という実在の人物を語る文脈の中での記述です。「大人」「寛容大仁」といわれる陳さんの執筆作法としては、理解に苦しみます。引用の最後の二行、**「そんな噂は嫉妬がつくりあげたもの」**とフォローしてみても同じです。